

読書行為の次元

國本千裕，宮田洋輔，小泉公乃，金城裕奈（慶應義塾大学大学院），上田修一（慶應義塾大学）
chihirok@slis.keio.ac.jp

抄録：本研究は読書を様々な次元からなる複雑な行為と考えたうえで、現代の成人が、読書をどのような行為と捉えているのかを明らかにすることを目的とした。人々の読書に対する考え方を既成概念にとらわれずに聞き出すため、20代～40代の計29名を対象にフォーカスグループ・インタビューを実施した。発言を分析した結果から、既存の読書調査においてよく言及されている、対象に加えて、行動、背景、目的、作用、場所の5種類の読書行為を構成する次元を見出した。

1. 現代の読書

2001年施行の「子どもの読書活動の推進に関する法律」、2005年の「文字・活字文化振興法」の成立、2008年6月になされた2010年を国民読書年と定めた衆参両議院の「国民読書年に関する決議」と、読書および「文章」を読むことに対して立法府を中心に継続した関心がみられる。また読書の実態を示す継続的な読書調査として、「読書世論調査」（毎日新聞社）、読書についての「全国世論調査」（読売新聞社）などがある。一方で、「現代の読書」に関する研究は、児童や生徒の読書や読書指導、あるいは学習との関連に関する調査と論考¹⁾を除けばそれほど多くはない。

前述の各種施策では、読書は自明であると考えられており、読書調査における関心は読書の対象に集中している。たとえば「読書世論調査」（2008年版）²⁾の質問項目から、何が読書の対象となっているかを読み取ってみると、1) 読書の対象となるのは書籍と雑誌である、2) 新聞は読書の対象に含まれない、3) 広い範囲の読書（書籍と雑誌）と狭い範囲の読書（書籍）とがある、といった認識が背後にあることがわかる。

読書は古くから行われている日常的な行為であるとともに、その行為自体が特別な関心を惹いてきた。近年、書物史、読書史、読者史といったアプローチにより、読書を歴史的に見た多数の著作が発表されており、この中では読書に関して音読と黙読、集団の読書と個人の読書、読者層の変化といった多様な研究がなされている^{3) 4)}。

2. 研究目的

読書には多様な側面があることから、何を読むのかという対象の側面だけからこれを探るのは

不十分であろう。たとえば“本を読むとき必要なものとしていちばん最初に求められるのは、どういう本を読むかだと、普通は考えられています。しかし、実際は違います。本を読むときに自分で自分に一番最初にたずねることは、その本をいつ、どこで読むか、本を読む場所と時間です”⁵⁾という発言や、“「読む」という行為には、いついかなる場合でも、ある程度、積極性が必要である。完全に受け身の読書などありえない”⁶⁾といった発言は、読書が対象以外の様々な側面から取り上げられる行為であることを示している。

本研究は、現代の読書とは何かを解明する作業の一環として、読書がどのような次元から構成されているのかを明らかにするとともに、各次元がどのような構造をもつか、その全体像を明らかにすることを目的としている。

3. 調査方法

3-1. FGI 概要

既成概念にとらわれず、人々の読書行為に対するさまざまな考え方を探査するため、調査方法としてフォーカスグループ・インタビュー（Focus Group Interview:以下FGIと表記）を採用した。FGIは特定のトピックについて、参加者同士が自由に話し合うグループ・インタビューの手法である。FGIは合意形成を目的としておらず、参加者の意見の広がりから、定量的な調査では得られない要素を探査することができる⁷⁾。参加者が読書に対してどのように感じ、考え、行動するのかを探るにあたり、FGIは最適な手法である。

調査対象者は公募や紹介によって集めた読書好きの人々29名である。読書の捉え方を探査するという調査目的のため、読書をしない可能性が

高い読書好きではない人よりも、読書をする可能性が高い読書を好む人の読書観を優先し、調査対象者は読書好きに限定した。

FGI の実施にあたっては、 “参加者の背景、人口統計、社会文化的特徴に関しては、同質の選抜を行うこと”⁷⁾が推奨されている。本調査はこれに従い、調査対象者を年代・属性によって区分し、それぞれ 6 名程度で、計 5 回の FGI を実施した(表 1)。それぞれの FGI は 2008 年 5 月から 7 月にかけて 1 時間半程度で行った。

FGI では参加者に、①日常の読書の状況と、②読書をどのように捉えているのかについて、自由な話し合いを求めた。FGI の様子はすべて録音・録画した。

表 1 FGI 参加者の概要

	人數	男	女	平均年齢	属性
第1回	7	6	1	23.2	学生
第2回	5	2	3	21.4	学生
第3回	6	2	4	32.1	社会人
第4回	5	1	4	46.4	社会人
第5回	6	3	3	26.1	社会人
合計	29	14	15	29.3	

3-2. 分析方法

FGI の中で、読書行為に言及した発言を抜き出し、抜き出した発言の内容に即したコードを付与した。その後、付与したコード間の関係を整理・集約していくことで分析を行った。1回のFGIに対する分析の流れを図1に示す。

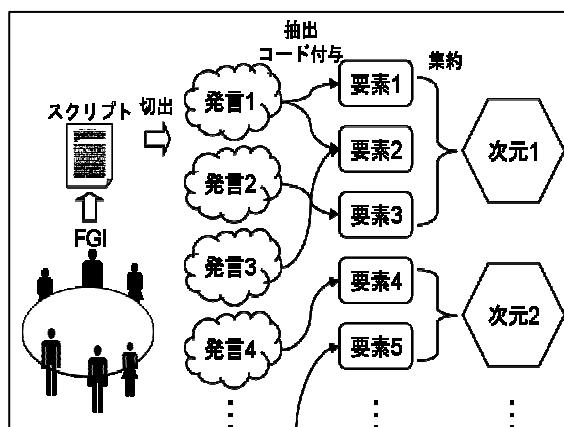


図 1 FGI 分析の流れ

はじめに録音したインタビューをスクリプトに書き起こした。スクリプトから調査者1名が読書行為に言及した「発言」を切り出した。切り出された発言から、調査者4名が読書行為を構成すると考えられる「要素」を抽出し、要素の内容に即したコードを付与した。分析を繰り返す中で、コードがすでに存在すれば該当のコードを付与し、存在しなければ新たなコードを作成して要素に付与した。図2に、切り出された参加者による発言（ビジネス本）と、抽出してコードを付与された要素（ビジネス書）の例を示した（ゴシック体表記が実際の発言）。

抽出した「要素」を概念的に整理し、類似した「要素」を集約していくことで、読書行為を構成する「次元」と、その下位区分である「サブ次元」を導き出した。

ビジネス本は私の中であんまり読書じゃない。

要素（コード付与）：ビジネス書

→サブ次元：ジャンル

→ 次元: 対象

図2 発言とコードの例

1回のFGIが終了するたびに一連の分析を行つた。「要素」の抽出（コード付与）の結果については、調査者全員で繰り返し合議し、調査者間の合意の形成と、分析枠組みの修正を図つた。一連の分析を5回分のFGIのスクリプトすべてに対して行つた。

4. 結果

4-1. 読書行為を構成する次元

分析の結果、読書行為を構成する次元として図3に示した5種類を見出した。各次元に対する参加者の述べ言及件数は全体で192件であった。ここで示した言及件数は、各要素に何名の参加者が言及したのかを示したものである。同一要素に対して、同一人物が複数回言及していた場合には、これを重複として削除した。

a. 次元 1 「対象」

参加者の言及が最も多かったのは、読む対象に関するものであった。たとえば「体裁の整ってい

る本っていうのを読むのが読書だなって思う」、「ビジネス本は私の中ではあんまり読書じゃない」といった発言から、読書とは、ただものを読む行為ではなく、「何を読むのか」によって左右される行為であることが分かった。

b. 次元2「行動」

「どのように読むのか」も読書か否かを決めるうえで重要な側面であった。「読書というのは、あるものをしっかりと読む」行為である、あるいは「ちょっと時間つぶしに…（略）…読むっていうのはなんか読書じゃない」など、読書には読むときの姿勢や読み方も広く含まれていることが分かった。

c. 次元3「背景・目的」

「なぜ読むのか」という行為の背景や、「何のために読むのか」という行為の目的も、読書の構成要素である。「知的好奇心とかを満たしたり、あとは教養を高める行為」は読書だが、「迫られてしまうがなく読んでる」場合は、何を読んでいても読書とみなさないなどの発言があった。

d. 次元4「作用」

読書には行為の結果も含まれていた。あるものを「読んだ結果がどうなるのか」によって、その読みを読書とするかどうかが決まる場合もある。ある参加者は、あるものを「読んで考えさせられ」、「読んで楽しいと思えば」それを読書とみなし、読んだ後「なにも感じなければ、読書ではない」としていた。読んだ後の結果次第で、ある読みは読書とみなし、ある読みは読書とみなさないことが分かった。

e. 次元5「場所」

「どこで読むと読書になるのか」も読書行為に影響する。特定の場所を好むケースでは、「家で本当に集中できる環境を作り読む」という発言がみられた。「ベッドの上で、夜中」に読む、あるいは通学中の電車の中で読むなど、時間との関連が示唆されたケースもあった。反対に「状況は別に問わない（いつどこで読もうが読書とみなす）」という発言もあった。

4-2. 次元「対象」の詳細

既存研究同様、本研究の結果でも、読書は何を読むかが重要な位置づけを占める行為であると

分かった。「対象」に関する発言をさらに詳細に分析した結果、読書の対象は、従来のような書籍や雑誌、新聞といった単純な分類だけではなく、1)どのようなジャンルであるか（文字主体・絵主体のジャンル）、2)どのような物理的媒体であるか（紙・電子）、3)読み手が内容のどの点を評価しているか（ストーリーがある・主題主張が明確である・価値が長く持続する）といった3つの構造に分けて多面的にみることが可能であった。

1)ジャンルでは、同じ文字中心のジャンルでも、「小説」や「闘病記」などを読むことは読書とみなす一方で、「携帯小説」や「教科書」を読むことは読書とみなさなかった。「マンガ」を読むことについては読書とするか否かで参加者の意見が分かれていた。2)物理的媒体では、紙媒体である「書籍」などを読むことは読書とみなしていた。その一方で電子媒体であるインターネット上のコンテンツや「PDF」を読むことは読書とみなさない傾向があった。3)内容評価では、ストーリーに「一貫性があり」、「話が作りこまれている」もの、「主題・主張が明確」などを読むことを読書と捉えていた。反対に主題・主張のないものを読むことは「単なる情報」の収集であり、読書と捉えない傾向がみられた。

4-3. 「対象」以外の次元

従来の読書調査が焦点を当ててこなかった対象以外の側面に着目して内容の分析を行った。以下では対象以外の各次元、すなわち、行動、背景・目的、作用、場所の分析結果を示す。

次元「行動」は、1)能動的、2)受動的、3)読み方の3種類のサブ次元に分けられた。参加者は能動的な姿勢、すなわち「頭をつかって」「時間を作り」「努力して」読む場合にはこれを読書とみなしていた。一方で受動的な姿勢、たとえば「考えて読んでるわけではなく」読む場合にはこれを読書とみなさなかった。受動的な姿勢に関して、パラパラと読む読み方や、細切れに読む読み方なども読書とみなさない。

次元「背景・目的」では、目的がない読書は読書とみなさない傾向が顕著だった。知識や教養を得ようという目的で何かを読んだ場合や、読む背景に好奇心がある場合には、参加者はこれを読

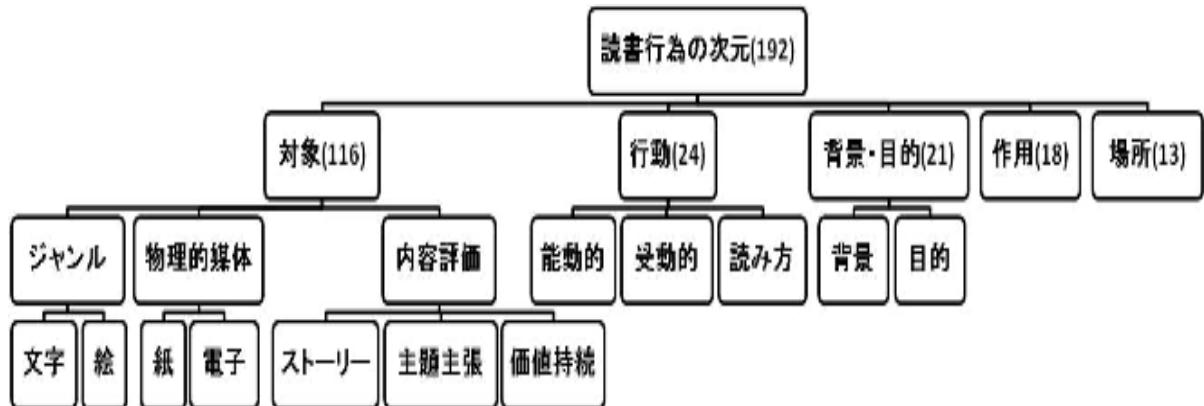


図3 読書行為の次元

書と捉えていた。一方、会社から強制されたり、「プレゼンテーション作るのにこれ読まなきやいけない」など、義務感を背景に何かを読んだ場合、参加者はその行為を読書とみなさなかった。

次元「作用」では、参加者が何かを読んだ結果として、楽しかったと感じたり、感動したり、何かを考えさせられた場合にはこれを読書とみなしていた。一方で心に響くものが何もない場合はこれを読書とはみなさなかった。この他にも、読んだことで書き手の「価値観を取り入れる」ことができた場合や、旅行記などで「時間を共有できた」場合に、これを読書と捉えていた。

次元「場所」については、通勤・通学時間に「電車で」読む、あるいは「夜中にベッドで」読む、など、時間と密接な場所で読書が行われる可能性が示唆された。一方で特定の場所で読みたくないとした参加者は1名を除き存在せず、なかには読書をするのに状況は問わない(どこで読もうが読書である)と答えた参加者もいた。「場所」という次元は、読書か否かを決めるうえではそれほど重要な側面ではない可能性が示唆された。

最後に対象者29名の言及全体（述べ件数192件）を元に次元同士の相関をみた。特に目立った数値は出なかったが「作用」と「行動」に関しては0.45と若干の相関がみられた。

5. 考察

本研究は、既存の読書調査のように、読書を自明のものとして捉えるのではなく、現代の成人にとって「読書とは何なのか」を根本から解明する

ことを目的とした。その結果、読書とは単に本や雑誌など特定の対象を読む行為を指すのではなく、その行為がなぜ、何のために、どのように行われるのか、そしてその結果どういう作用があればよいのかといった、「ものを読む行為」の前後にある背景・文脈をも含んだものであることが明らかになった。加えて、既存研究において中心的に取り上げられながらも、一次元的な捉えられ方をしていた読書対象についても、ジャンルや物理的媒体、読み手の内容評価といった面から多次元的に区分できることを示した。

読書はこのように多様な次元から構成される複雑な行為であり、その次元自体も複雑な構造をもっている。今後、読書研究を行ううえでは、こうした読書の多次元性に着目し、より奥行きのある読書観を構築していくことこそが重要である。

引用文献

- 1) 平山祐一郎. 大学生の読書状況に関する教育心理学的考察. 2008, 野間教育研究所紀要, 第46集. 財団法人野間教育研究所. 226p.
- 2) 読書世論調査 2008年版. 2007, 毎日新聞社, 240p.
- 3) 読むことの歴史 : ヨーロッパ読書史. シャルティエ, R.; カヴァッロ, G. 田村毅ほか訳. 2000, 大修館書店, 634p.
- 4) 永嶺重敏. 雑誌と読者の近代. 1997, 日本エディタースクール出版部, 281p.
- 5) 長田弘. 読書からはじまる. 2001, 日本放送出版協会, 201p.
- 6) アドラー, M. J.; ドーレン, C. V. 本を読む本. 1997, 講談社, 265p.
- 7) ヴォーン, S.; シューム, J. S.; シナグブ, J. グループ・インタビューの技法. 井下理監訳. 1999, 慶應義塾大学出版会. 215p.